
氷結と白炎の転生者

天空疾風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷結と白炎の転生者

【Nコード】

N5836M

【作者名】

天空疾風

【あらすじ】

田中誠一。彼はある事故によって死に、転生することになった。

テンプレ通り&ちょっととした手違いで能力を手にした彼が進む道は

…

プロローグ：コスプレ軍団？

俺の名前は田中誠一。大学生だ。

突然だが、この状況を説明できる者はいるだろうか？

いたら是非説明してもらいたい…

今日も、特に普段と変わらない朝だった。

強いて言えば、今日が祝日だということだが。

で、適当に散歩にでも行くことにして家を出て5分ほどすると…

子供が車にはねられそうになっていた。

信号は… 青だったと思う。

”思う”というのは、咄嗟のことだったのでそんなこと気にせずその子を突き飛ばしたからだ。

だが、代わりに自分が撥ねられてしまった。

そんなに痛みは無かった。（感覚が麻痺していたのかもしれないが）
よくは分からなかったが、恐らく自分は死んだのだろう。

でも…

何で目の前にシスター、坊さん、巫女さん… その他諸々の宗教関係の服を着た人達がいるんだ…？

プロローグ：コスプレ軍団？（後書き）

初投稿ですがよろしくお願ひします。

第一話：いろいろおかしい

コスプレ軍団だけならともかく、よく見ると今自分のいる場所も妙な所だった。

第一に、後ろや横を見ると限りなく広い空間が広がっている。背景は白。

第二に、地面と思われるものがない。浮いているっぽい。

第三に… 変なコスプレ軍団の向こう側に、大理石の門のようなものがある。

…明らかに死後の世界とかそんな感じですね。ありがとございまして。

5

「あの〜 誰にお礼言っているんですか？」

「というか、それ以前にすごく失礼なことを言われたような気がするがな」

シスターと騎士っぽい人が話しかけてきた… って心読まれた？

「向こう側じゃ心で会話するのが当たり前だからな」

「あっちに行けば当たり前なんだけどね〜 というかそっじゃないとまともな生活できないし」

「今はあなたに合わせるために声を使っているんだよ」

そうなのか？ さすがは死後の世界。

「ああ。ここは厳密に言うと死後の世界じゃないから」

「は？ じゃここどこなんですか？」

まさかあの時死なないでこの世界にワープした、とか…

「うん。君は確実に死んだから」

「はあ、やっぱり…」

「でもって、ここは死後の世界に入る門の少し手前だね。普通はここで止まることなんてないんだけど」

「ああ… あれが」

三途の川とかじゃないのか？ で、今ので気になったのだが…

「なんで俺はここにいますか？」

「ぎくっ！」

「……まさか俺は手違いで死んだ…とか」

「な、何で分かったの…!？」

シスターさん… ぎくっ！とか言って目が泳ぐとかバレバレにもほどがあるって…

「テンプレ通りだと、能力受け取って異世界に転生…だよな」

「はい… できれば元の世界に戻してあげたかったです…」

「怒らないでやってくれないか。ワザとじゃないんだ」

「本当にすみませんでした！」

「…いや、怒ってないからいいですよ」

というかここまで真剣に謝られて怒る方が無理。シスターさん可愛

いし（こつちが本音）

「でもどうして事故が起きた場合の転生について色々知っているんですか？」

「お約束ってやつだ。気にするな」

「？ 分かりました。では、貴方に与える能力の説明をしますね」

「ようやく私の出番ですか。では…」

やっと台詞が来た巫女さん（？）の話によると…

能力名：白炎^{はくえん}

属性：光・聖

形状：球形の炎

効力：対象の強度上昇・破壊力の減衰・自然治癒の促進・毒性の無効化など

備考：炎のようではあるが熱エネルギーは持たない。

…なんだこれ？

「攻撃向きじゃないですね」

「その通りです（というか私の出番が消えたような気がするのはいなせ？）」

「こういう場合は、チート級の能力とかじゃないんですか？ 普通」

「あまり強い能力を持たせると世界のバランスが崩れます」

「その代わり防御と回復においてはかなり優秀な能力ですよ」

「…分かりました」

どうせただで貰うんだし、贅沢は言つまい…

「では転生の術式を…』どいたどいた〜!』 ってきゃあ!」
「へ…?」

なんか変なの(リアカー?)が飛んできた シスターさんが避けた
自分に向かって一直線

<ブラックアウト>

「大丈夫ですか?」
「…死ぬかと思いました」
「すいませんねえ〜 いや〜まさか門を出たところにこんな集団が
いるなんて〜」
「いつも言っているじゃろつが… なんでお主は毎度毎度面倒事を
引き起こすんじゃ」

上からシスターさん・俺・侍(金髪)・仙人(赤髪)

…… 似合わない(後ろの2つ)

「で… 何が起きたんですか?」
「この金髪侍が、死後の世界で要らなくなったものを捨てにきて、
お前にぶつかった」

「説明ありがとうございます。で、こいつ殴っていいですか?」
「いいぞ」

「えっ、ちょっとまって言い訳ぐらいさせて下さいよ〜」

「3秒」

「今日はコスプレ大会があるので、全員門の向こう側にいると思
ってたんですよ〜」

うわっぴったり3秒で言いやがった（しかも間延びした声で）　む
かつくつ

「ってコスプレ大会？」

「そうですよ〜　今日は百年に一度開かれるコスプレ大会の日なん
です。全員参加なんですよ〜」

「あっちでは皆大騒ぎだぞ。宇宙的規模の祭りだからな」

…私、田中誠一は死後の世界って色々おかしいと思いました。

第一話：いろいろおかしい（後書き）

転生まではあと一話です。駄文ですがよろしくお願ひします。

一部白炎についての情報を変更しました。（属性）

第二話…いざ転生…ってちょっと待ったあ！

「じゃ、改めて転生の術式を起動するね」

「はい、よろしく願います」

シスターさんが呪文を唱え始めた。

i v e r e g i d o b i l …

「そういえば、俺が転生する世界ってどんな世界なんですか？」
「ああ、それはな…」

f i a l v i o d a a c t i a …

「『魔法少女リリカルなのは』系列b - 364次元世界だ」
「…はい？」

b i a l i o d i a e x e l a r !

「ちょっと待ったあ！ それって…」

最後の言葉空しく、転生の術式によって田中誠一はこの空間から姿を消した。

<魔法少女リリカルなのは系列 b - 364 次元世界>
　　<海鳴大学病院>

「はい、元気な男の子ですよ」

ここどこだ…？

「おお、よくやったぞ華世。おーよしよし」
　　なんか体動かないし…

「あう〜（あの〜）」

…もしかしなくても、今の状態って…

「よし、お前の名前は”誠一”だ」

赤ん坊ですかー！？ あばばば…

<死後の世界一歩手前の空間>

「行っちゃいましたね」

「ああ」

「…彼、大丈夫でしょうか？」

「……」

確かに、あの能力だけで”あの世界”を渡り歩くのは難しいかもしれないな…

「もつと攻撃力のある能力の方が良かったのではないか？ アリス」

「そうですね。何もあんな攻撃力の欠片もないような能力にしくても…」

「心配することはありません」

アリス… 能力を選んで来たのはこいつだったか…

なんというか、昔から考えていることがよく分からないやつだ…

「あの能力は”ウィル・サンタマリア”が作った結晶石の能力です」

……こいつは今何と言った…

「えっと… よく聞こえなかったのもう一度言って貰えませんか？」

「あの能力はウィル・サンタマリア”が作ったものです」

「ゆ、悠久の魔法戦士…ですか？」

「その通りです」

悠久の魔法戦士…

幾多の世界を巡り、右手で剣を・左手で魔法を操り、あらゆる敵を殲滅し…あらゆる攻撃を防いだと言われ…

彼の作った魔導書は、いくつかの世界で禁書指定され…

そして…彼が作った5つの魔法の素『結晶石』は、魂にとけ込ませることで強力な能力を与えるとされる…

(とんでもないことになりそうだな…)

少し言葉を交わしただけの青年に、かなり同情してしまった騎士が、ここに一名。

<その頃のとある場所>

「ありゃ〜 これはちよつとまずいことになったかもな〜」

「はあ… また面倒事かの？」

「ん〜 ばれなきやいいんだが〜」

一拍おいて、金髪の侍もどきは口を開いた。

「『悠久』の魔導書が一冊、行方不明〜」

「な、なんじゃとー！ てか何でそんなものが廃棄処分なんじゃ！

！」

「損傷が激しかったみたいだね〜 というか〜声大きい〜」

「むぐつ… はあ… よりによって何で『悠久』なんじゃ…」

「まあ〜ばれないことを祈る〜」

無くなった魔導書の術式名は…ライブラリ

第二話…いざ転生…ってちょっと待ったあ！（後書き）

前回と今回合わせても良かったかもな…

とりあえずやっとな転生しました。

世界名とかの説明は次回になります。

呪文や「悠久」の名前は適当です

なのは編第一話：家庭事情はご都合主義（前書き）

初の前書きでアンケート募集しようかなあ〜と思います。
詳しくは後書きで。

なのは編第一話：家庭事情はご都合主義

俺が転生してから3年ほど経った。

この3年間にあった色々な出来事は、一度記憶の片隅に追いやるところにして…

家族を紹介したいと思う。

父親の名前は田中正則。母親の名前は田中華世。

で、俺の名前が田中誠一だ。

転生前と全く同じ名前なのは… まあ気にしないことにしよう。その方が楽だし。

だが…

父親が剣道有段者で、母親がミッドチルダ出身の魔導士ってどういうこと！？

おかげでデバイスも目にしています。てか家の倉庫に転がってるし。
(きちんと管理した方がいいと思う)

おまけに魔力もきちんと(母さん曰く結構強いつばい)あるらしい。
白炎だけじゃきついか… とも思ったけどこれなら原作介入できそうだ。

ご都合主義万歳。

え？ 平穩に暮らすのでもいいんじゃないかって？

こういうのは首を突っ込むのがセオリーです。はい。

可愛い子もいっぱい居るしね。(ロリコンではないです(ここ重要)
力があるのなら介入は決定事項。

介入すること決定したはいいけど、まだ自分のデバイスは持ってない。
い。

明日、誕生日プレゼント代わりにくれるらしいです。楽しみ楽しみ…

〜次の日〜

「お誕生日おめでとう!!」

「ありがとう母さん、父さん」

「はい、私たちからのプレゼントよ」

来た来たー！ マイデバイスはどんなやつかなー？

「インテリジェントデバイス、名はレイジスだ」

「ありがとうございます」

待機状態はカード型か。マスター認定つと…

「無事マスター認定も上手くいったみたいね」

「そのようだな…早速セットアップしてみたらどうだ？」

「はい。レイジス、セットアップ」

「心得た。マスター」

バリアジャケットのイメージは… うん、昔プレイしたゲームのキヤラの服装で…

「バリアジャケット展開終了っと…」

イメージ通り、白い服で肩の部分などに青い模様をついた服ができた。

デバイスの形状は…杖か。色は空色。先の方に透明の花びら（葉か？）のようなものがついている。

「おめでと、誠ちゃん」

「さっそく魔法を使ってみたらどうだ？」

誠ちゃんってのはやめてほしい… が、無理か。
最初にやるとしたらやっぱり魔力弾だな。

…青色の魔力弾ができた。的に向かって飛ばしてみると、一直

線に進んで的に当たった。

「上手いわ〜 魔力光は青色なのね」

「次は防御魔法だな。華世」

「ええ、行くわよ誠ちゃん」

母さんが魔力弾（手加減しているのかかなり弱い）を放ってきた。
よし…

「プロテクション！ …ってあれ？」

何故か盾が出ませんでした。 Oh My God…

なのは編第一話：家庭事情はご都合主義（後書き）

アンケートです。

主人公のヒロイン役は誰にしますか？

- 1 アリサ
- 2 すずか
- 3 フェイト
- 4 はやて

期限は本編突入時までです）
たっさんの意見お待ちしております

第二話：魔法と修行と白炎と（前書き）

アンケート続行中です
よろしくお願ひします

第二話：魔法と修行と白炎と

前回、なぜかプロテクションが出来ませんでした。
あらずじおわり。

あの後まともに攻撃くらって、吹っ飛ばされました。（痛かったし）
母さんの話によると、どうも俺は防御魔法には不得手らしい…
バリアジャケットも、見た目だけで”ダメージを軽減する”程度に
しか使えないっばいです（…まさかこれって死亡フラグ？）

まあ白炎で補助すれば並の防御力は保てるみたいだから、よしとしますか。

〜次の日〜

「おい誠一、起きろ」
「……………」

まだ朝早いです。起きたくない起きたくない…

ドカツ

・・・強制的に起こされました。さっきの音はベッドを蹴った音ではないと思いたい。

（庭にて）

「どうしたんですか？ 父さん」

目の前の敵（睡眠妨害の）は、黙って竹刀を投げてきました。え？

「構えなさい」

「…これは？」

「今日から修行をつけることにした。早くしろ」

…僕は3歳児ですよ。分かってますか…？

「うちの流派では3歳になった時から鍛えることになっている」

「…俺の意志は？」

「あきらめろ」

結局何もできずにやられ、後で腕立て伏せと腹筋をやるよう言われました・・・

〜数日後〜

まだ修行には慣れません。かなり手加減されているんだろうけど…でも今日は父さんが出張なので、少し休めた。ラッキーでもって、今日は母さんも忙しいみたいなので、一日中訓練室にいられます。

訓練室で何をやるかって？ 白炎の性能を確かめます。
一人で行動できるようにしてから、ようやく色々試せる日がやってきたんだからな。万歳！

今まで軽く試して、分かったことをまとめてみると…

- 1 やっぱりこの炎は熱くない。
 - 2 かなり柔らかい感じの炎です。（熱持っていないから炎かどうかよく分からないけど）
 - 3 別に球形じゃなくても、ある程度は形をいじれるっぽい。
 - 4 物にぶつけると、それを覆うような感じで炎が固まる。
 - 5 ある程度硬さ？をいじれる。（どっちにしても柔らかいけど）
- 3は注意かな。吹き出すような感じでやれば、浮くこともできる。
（魔法あるからあんまし意味無いけど）
- 4はバリアジャケットの強化に使える。一度発動すれば意識しなくても効果が持続するみたいだし。

で、5だが…

これ上手く使えば、家庭 師ヒツ マンリ ーんのツ が使うX -
B u r e もどきが撃てるんじゃない？

これを試するのが今日の本題。
では早速行ってみよう

オペレーターがないから立った状態で、バリアジャケットは念のため展開。

右手から後ろの方に炎を噴射。

左手を前に出して…

「X - B u r e」

次の瞬間、俺は驚愕することになった…

なぜなら…

普通の魔力弾で壊せるレベルの的が、傷一つ付かなかったからだ。

第二話：魔法と修行と白炎と（後書き）

あと一話書いたら人物紹介に入ります。

原作メンバー出てくるのはその後です。

（早く出せ）

第三話：白炎って使える？使えない？（前書き）

アンケート実施中

たぶん明日か明後日あたり締め切りです。

内容：ヒロインは、アリサ・すずか・フェイト・はやての誰にしますか？

第三話：白炎って使える？使えない？

白炎についての考察。

- 1 手か足からのみ出せる。（額からとかは出ない）
- 2 熱を持たない。
- 3 形は球形が基本。物に対して使うときは、覆うようなかんじになる。ある程度操作可能。（盾とかにできる）
- 4 硬さはある程度いじれるが、柔らかすぎて攻撃には向かない。
- 5 弾丸や砲撃のようにすることもできるが、ぶつかったとたんに”対象保護能力”が発動するらしい。というかそれ以前に分散して（柔らかすぎて）意味がない。
- 6 武器に対して発動すると強度が上がる。切れ味とかはほとんど変わらない。

…攻撃力ほぼ0だね。この能力。

恨むよ… 巫女さんシスターさんその他いろいろ（の格好をした人たち）

魔力もっているだけマシってもんです。

家系的なものなのか…？ 親が魔導士で良かった…

< 3年後 >

時は流れてもうすぐ小学生です。

どこの学校に入るかって？ 聖祥大学付属小学校に決まっているじやないか。

なのは達とは会わないとな。原作介入（&フラグ獲得）には必要な出来事。

翠屋（地図で探した）に行ってもいいが、まあ学校でいいだろう。

これも親のおかげです。なんか世話になってばかりのような気がする（事実そうだが）

で、今日も朝から修行です・・・

左上から攻撃。受け流して距離をとる。

左後方から飛来物。数は5。1つだけ弾いて後は避ける。

正面から敵接近。左手に作った魔力弾で牽制し、斬りかかる。

受け流され、蹴り飛ばされる。空中で一回転し、着地。

着地と同時に竹刀が迫る。咄嗟に受けたが竹刀を弾き飛ばされる。

首筋に竹刀をあてられ、終了…
チエックメイト

「今日はここまでだ。食事にしよう」

「はい」

終了の宣告を受け、目隠しを外す。
何を隠そうこれだけの動作を視覚なしでやってのけたのだ。なんて
6歳児（本当は6歳じゃないけど）
3年間の修行で、気配察知や剣術のスキルがかなりアップした。も
ちろん力や足の速さも同年代の子供とは比べ物にならない。

…改めて思っけど6歳児のものじゃないよな。精神もだけどさ…

午後は魔法の訓練です。

で、皆さんに大事なお知らせがあります。

どうも自分には、氷結系の魔力変換資質があるみたいです。

判明したのは一昨年の夏。

暑くて暑くてたまらない時に、快適さを求めて才能が開花したらしい。

…なんとも妙な理由の気がするが。

魔導士ランクはB+

確かなのは達はAAとかAAAとかだったから… 全然足りないぜ

orz…

子供にしては上出来なんだよ？ これでも。

何とか氷結系の資質とテクニク・そしてちよつとあやふやな原作知識で乗り切るしかない。

魔力弾の方は、集束・圧縮・縮小が得意。

逆に言うと、魔力量の関係で放出、後は制御が苦手である。

特に制御の方は才能が無いとしか言えない…

ほぼ直線軌道でしか放てません。多少は曲げられるけど。

例外は撃つ時に弾丸に回転を加えたり、タイミングをずらして放つこと。

自分のすぐそばにあれば、結構制御できるみたいだ。

盾は白炎を使うことにした。

ちなみに白炎はレアスキル扱い。

物理的な攻撃にはあんまり強くないけど、魔力弾とかはかなりの防御率で防げる。

後使える魔法は、結界・探査魔法・封印（デバイス任せ）

そして最後に……フリージングドライブ

これは、氷結系の魔力変換資質を使って戦うもの。

現状では切り札といった感じで、派生系にはデバイスの補助なしで使用できるものもある。

よし…これぐらいあれば、何とか原作介入できるだろう。
残りの時間でもう少し強くなれば…

あれ…？ そついえば残りの時間ってあとどれくらいなんだろう？

第三話：白炎って使える？使えない？（後書き）

なんか上手く書けないなあ…

キャラが居ないせいか書きにくい…

次回は登場人物紹介です。（空気のデバイスについても紹介します）

人物紹介（なのは編A）

< 田中誠一 >

いろいろあつて「魔法少女リリカルなのは系列 b - 3 6 4 次元世界」に転生した。

原作知識はある程度あるが、細かいところを忘れていることもある。ただし、登場人物（の女の子）に関するデータは忘れていない模様。現時点では、原作と全く変わらない世界にいると思っており、時系列についても考慮していない。

魔導士ランクは B +

使える魔法は、魔力弾・結界・探查魔法。

氷結系の魔力変換資質を持つ。

防御魔法においては絶望的、操作は自分の近くでないとあまり上手くいかない… といった弱点を持つ。

また、レアスキルとして防御と回復に特化した能力である白炎を持つ。

年下好き。ロリコンではない。（本人談）

3歳の時から父親に修行をつけられているため、身体能力は平均的な同年代の子供のそれより遙かに上。

ただし、剣術についてはまだ未熟（というか体捌きを覚えるのがメインである）

< レイジス >

インテリジェントデバイス。

待機状態ではカード型。セットアップ時の形態は青い杖である。性格は冷静沈着。

まだ会話シーンがほとんどないが、少し変わった口調で話す。

会話シーンはもつちよっとしてから増える予定・・・

第四話：原作（前書き）

アンケート途中経過

アリサ 1票

すずか 1票

フェイト 1票

アリサ&すずか 1票

となっております。まだ募集中なのでよろしくお願いします。

「よろしく」

…今の誰？

第四話：原作

よくよく考えたら…

今が無印編で、まだ原作が始まっていないなんていう保証はどこにもない。

おまけに、原作沿いかと置いていたけどよく似た別の世界だった…なんてこともあるかもしれない。

これは早速調査しなくては…

<入学式>

この日無事に入学した俺は、早速自分の学年に原作メンバーがいなか確認してみた。

結果…いませんでした。上の学年も見てみたのに…

要するに、なのは達とは年代が違っちゃったこと？

原作介入の野望が一瞬で崩れ去ったし…

いやいやまだ諦めるのは早い。

こうなったら翠屋へ行って確かめよう。

〜次の日〜

「あの角を右に行ったらすぐか」

俺は今、翠屋に向かっている。
もちろん学校行ってからだがな。
で、翠屋の側の角を曲がると…

タツタツタツ…「きゃっ」「へ?」「ドン

子供が一人、走ってきてぶつかりました。よくあることだな。
気をつける! って言いたいが、まあ子供だし許してやることにし
よう。

「大丈夫?...ってえ...?」

「にゃ〜 大丈夫でしゅ〜」

この口調... この容姿...

幼稚園時代の高町なのは!?

「こら、よそ見して走っちゃ駄目って言ったでしょう?」「うん…」

「ほら、お兄ちゃんに謝らないと」

「うん。ごめんね」

「…はっ い、いえ、大丈夫ですから」

危ねえ… あまりの衝撃にフリーズしてたみたいだ…

それにしてもなのはかわい（悪寒がしたのでやめておこう…）

それにしても少しなのは明るくないか？

確か幼少期の頃は結構つらい目にあったって設定があっただと思うんだが…

もう解決しているのかもな。まさか記憶違いか？俺が？

まあ、とりあえずこれで年代確認と原作メンバーとの接触（意図せず）成功。

あれから少し話をして分かったことだが、なのはは来年小学生になるらしい。

つまり…俺はなのは達より一学年上。同学年じゃないのがちょっと残念だが…

原作開始まであと3年。楽しみだ。

<とある世界>

「ふう〜 ここまでくれば大丈夫か『逃げられると思ったの?』げつ、先回りかよ〜」

「僕から逃げるなんて1億年は早いよ」

突如あらわれた金髪の男に、物陰から現れた9歳ぐらいの銀髪の子供がにつこり笑いながら話しかける。

どう見ても年下の少年の方が、ずっと上の立場にいるような印象である。

「いや〜 『ライブラリ』をなくしちゃったことは謝るから〜」

「別にそれはそこまで怒ってないけどさあ……」

「じゃあなんで追っかけてくるんだよ〜」

「事故で壊しちゃったのを、なくした扱いにしようとしていたのが許せなかったから」

「く〜 なるほど〜」

「つてのは建前で、前々からその間延びした口調が気に障っていたから」

「おい！ 酷くないかそれ〜」

「ま、ライブラリのある場所も補足してあるしね」

「マジ!? 怒る理由ないじゃねーかー!」

「はいはい〜 うるさいうるさい」

イジメだのなんだの騒いでいる金髪の男をあしらいながら、銀髪の少年は考えを巡らす……

”ライブラリ”の現在地点は… 魔法少女リリカルなのは系列b -
364次元世界

魔法少女リリカルなのは系列a - 0次元世界”『原作』”とは少し違う軌道を描いている世界である。

第四話：原作（後書き）

これから更新ペース落ちる予定。
というか今までが早かったので…

第五話：友達とイベント（前書き）

アンケートは次話投稿時点で終了とします。

第五話：友達とイベント

一年経過して、二年生になった。

あれ以来なのは達原作メンバーとは接触していないが、今年は彼女たちが入学してくる年。

とりあえず友達になるところから始めよう。

…と思ったら…きっかけどうしよう？

と、とりあえず前進あるのみ・・・

くしばらくたったある日く

「はあ… どうするかな…」

なのは達が入学してからしばらく経ったけど、全然きっかけつかめねえ…

学年違うからなあ… せめて同級生ならやりやすいのに。

いっそのこと不自然でもなんでも登場… いやいや第一印象は大事だ。

知り合い程度から始めるかな…と思っただところで、

”ばちん”という音が聞こえてきた。

音の方向に目を向けると、見覚えのある少女が3人。

(あれ？ これってもしや…)

「痛い？ でも大事なものを取られちゃった人の心は、もっともつと痛いんだよ」

イベントシーン来た！！

なのはと金髪の少女(たぶん彼女がアリサだろう)が取っ組み合いの喧嘩に発展したところで

「やめて!!」

わお、結構驚いた。この展開は知ってたんだけどな。なんか鬼気迫るものを感じた。

ま、これでとりあえず仲直りして親友フラグっと。めでたしめでたし。

とりあえず今日は帰りますか・・・

「ところでそのあなた。さっきからずっと見ていたようだけれど、

私たちに何か用？」

え…？ 見つけた？

とりあえず誤魔化して逃亡…

「あれ？ どつかで会ったような…」

「なのはちゃん知り合いなの？」

「…あゝ お気遣いなく。ただの通りすがりです。ではでは…」逃
がさないわよ」「

な、いつの間にか回り込まれた！？ アリサ何者！？

「……ストーカーかしら」

「ふええ！？ ストーカー！？」

「な！？ 違う！」

冷たい目つきで睨んでくるアリサと、すずかを抱きしめるように1
歩下がったなのは…

なんでこうなったんだよー！？

<おまけ…デバイスを持っていた場合>

(ふむ… あれがマスターの好みなのか。なかなか目が高い)

「な、何を言っていやがるんだ！俺はロリコンじゃねえ！」

(……とりあえず強く生きるのだな。マスター)

「へ？」

「さっきから何やってるのよ……」

「お話……聞かせてくれる？」

「……(表情が見えない)」

「勇者誠一は、氷の女王 Arissa と白き魔王 Nannoha と夜の帝王 Suzuka に遭遇した」

「誠一は逃げ出した 逃げられない」

「……いい、嫌だあー！！」

「こんな夢をみてから誠一はレイジスを学校に持っていくのをやめたらしい……」

第五話：友達とイベント（後書き）

今回は短かったのでおまけを入れました。
はい、夢落ちです。すみません。 （誤魔化したともいう）

次回はいよいよライブラリが・・・

第六話：魔導書起動（前書き）

アンケートは21日24時で終了とします。

投票して下さった方々、ありがとうございます！

第六話：魔導書起動

〜前回のあらすじ〜
考え事をしていたら、なのは達にストーカーと間違われ、大変な目にあいました。

なんとか誤解をとき、無事ファーストコンタクトがとれた。（予想もつかない形で）
で、今俺はすごく悩んでいます。
その原因は数時間前にさかのぼることになるが・・・

〜回想〜

「私はアリサ・バリングス」
「私は高町なのは よろしくね」
「私は月村すずかといいます」
「俺は山田誠一だ。よろしく」

…とまあ自己紹介を済ませたわけだが、この後握手をすることになって、その時起きたことが俺を悩ませる原因となっている。
なのはと握手をしたときに

バチッ

という電気が流れるような音がして、自分の中に”何か”が流れ込

んできた。

「ふえ！？」

「…何だ？ 今の…」

なのはも俺もその感覚に戸惑ったが… 問題はそれではない。その後聞こえてきた…そして今も聞こえている念話のようなものが問題だ。

（起動に必要な魔力を吸収。起動開始します…）

（現状から、『田中誠』をマスターと認定。システムの機能を構築します…）

（システムの一部の損傷を確認。一部機能を使用することができません。自動修復不可。システムの再構築をお願いします。破損箇所は…）

～回想終了～

（いい加減なんだってんだよこいつは…）

（システムの再構築をお願いします。システムの再構築をお願いします。システムの…）

「あー！ もううるせえ！！」

（どうしたマスター？ 様子がおかしいが。ついに発狂したのか？）
「違えよ！」

はたから見れば変人かもしれないが、俺はいたって真面目だったの。なんで俺がこんな目にあわなク「システムの…」ぶちっ…

「うるさいって言うてるだろ！ ちったあ黙りやがれー！！」

...

(あれ…？ 止まった？)

まさかついに壊れたとか… そういや破損だのなんだの言ってたし…

(さっきから何をやっているのだ？ 変…マスター)

(おまえ今変人って言おうとしただろ！)

(……そんなことは無いぞ)

今の間は何だよレイジス。 お前には聞こえてなかったみたいだからいいだろうけどな。 数時間も同じ言葉を聞かされ続ければああもなるっての…
そついやさっきのやつは何なんだろうな？ 念話とはちょっと違うような気がしたけど…

(共有といます。マスター)

へえ〜 共有っていつのか… ってえ？

(今のお前か？ レイジス)

(何を言っているんだ？ ついに幻聴まで聞こえるようになったのか…)

(違ってるの。要するにこねって…)

(魔導書『ライブラリ』の基本システムの1つです)

やっぱりそうか…

って魔導書ってアレだよな。闇の書みたいなやつ。

でも周りをみても、魔導書らしきものなんて全然ないんだが…

(マスターの体の中にあります)

…は？ 体内ってどういうこと？

(マスターの魂と融合状態になっています)

…誰か説明お願いします。マジで。

第六話：魔導書起動（後書き）

（以下作者の愚痴ですので、飛ばしたほうがいいです）

上手く書けないです…

感想がほしい…

文才がほしい…

時間がほしい…

（以上で作者の愚痴は終わりです）

次回：物語の始まり です。お楽しみに！

第七話：物語の始まり（前書き）

アンケート結果発表！

すずか 2票

アリサ 1票

フェイト 1票

すずか&アリサ 1票

となりましたので、”すずか”に決定しました！

投票してくださった皆様、ありがとうございます！！

第七話：物語の始まり

ライブラリとかいう魔導書が起動した次の日、俺は庭の片隅でライブラリと共有（念話ではないらしい）をしていた。もちろん周りに誰もいないのを確認してだ。レイジスは変人扱いしてくるし、あんまりぼーっとしていると変に思われるしな。

（で、お前は何で俺の魂なんかと融合しているんだよ）

（破損状態のライブラリと、マスターの魂がぶつかったために起きた、共有機能のエラーによるものです）

つまり事故ってことか。でもいつの間に…ってあの時しかないよなあ…

死後の世界…じゃなくてその手前の世界だったか？　そこで金髪侍が運転？するリアカーがぶつかってきた時。

あの中にこいつ（ライブラリ）があったってことか…　偶然って恐ろしい。

で、こいつの能力なんだが、共有機能で得た情報によると…

共有機能：思考や情報を共有する。文字通り。

能力測定：相手の身体能力とか魔力…つまりはステータスを測定する。

記録レコード：単純に情報を記録するだけ…じゃなくてきちんと活用できるっぼい。

検索：記録してある情報を条件に合わせて取り出せる。Googleの検索と同じようなもの。

ただし、今までに記録した情報は読みとれないらしい…。残念だ…。もしかしたら”スターライトブレイカー”みたいな強力な魔法があったりしたかもしれないのに…

で、このうち能力測定をなのはに使った結果がこれ。

く高町なのはく

性別：女

種族：人間

身体能力：日常レベル。平均的な同年代の子供と同レベル。

魔力：A A A 桜色。

資質：特殊変換資質はなし。

身体能力は普通だが、魔力が半端ねえ…

小学生がA A Aだよ。さすがは魔王。

種族とかについては突っ込まないよーに。

ちなみに俺は…

く田中誠く

性別：男

種族：人間

身体能力：戦闘レベル。平均的な大人と同レベル。

技能：剣術中の下。体捌き上の中。

魔力：B + 青色。

資質：氷結系魔力変換資質。放出・縮小が得意。制御は自分の近くであれば可能。

少し詳しく載っているのは、今朝の訓練の様子からデータを収集したからだそうだ。

やっぱり魔力はB+程度しかないらしい… 少し不安だ。体捌きが上の中なのは訓練のおかげだろう。

それにしても使い道なさそうだなこの魔導書。

前のデータがあったら何かの参考になったかもしれないけど、読めとれないんじゃないかな。

同じ魔導書でも闇の書（夜天の書）の方が使い勝手いいと思う…

～時は流れて2年後～

もうすぐ俺は4年生になる。

この2年間なのは達とは友達付き合いを続けている。

詳しいことはいつか話すことにしよう。

原作開始はなのはが3年生になった春。

つまり後少し”ガシャン”

…ん？ なんの音だろ？ 確か今家にいるのは母さんだけだったと思うんだが…

台所…はいないな。てっきり何か落として割った音だともったのだが…

居間の方には…

…居た。割れた食器と一緒に倒れた母さんが…

おい、これって…

〈病院〉

あの後しばらく呆然としていたが、救急車を呼んで今に至る。手術するほどの大事だったらしいが…詳しくは分からない。

ともあれ無事に手術は済んだらしいのだが、何故か父さんだけが呼ばれて話をしている。

大事じゃなければいいんだが…　　と終わったみたいだ。

「待たせたな誠一。カフェにでも行こうか」

「…お母さんは？」

「今は寝ている。今のところ危険はないそうだから安心しろ」

「…分かった」

今の所って…　　なんか嫌な予感がするんだけど…

（病院内の休憩所にて）

「…誠一、話がある」

「何？」

休憩所についてからしばらくたって、父さんは話しかけてきた。

この雰囲気だと… ひよっとするかもなあ…

「…母さんの病気を治すにはな、外国の病院じゃないと駄目なんだ
そうだ」

「……そっか」

やっぱり引越しか。予想はしてたけど…

だって魔導士なのに母さん原作でできて無いしね。海外に行ってた
ってわけだ。

…なんで俺こんなに冷静なんだろ…

「だから海外に引越すことになったのだが…」

原作介入できなかったのは残念だな… 随分楽しみにしてたはずな
のに…

「お前はどっする？」

……は？ どっするって… 着いていくんじゃないの？

「お前にはこの町でやりたいことがあるんだろ？ ……転生者」
「なっ！？」

なんで父さんが転生のことを！？

「お前が普通の子供とは違うことなんて、とうの昔から分かってい
たさ」

「……敵わないな。父さんには」

まさか気づかれていたなんて思わなかった……

魔導士でもないのに転生に気づくなんて……何者だよあんたは……

「改めて聞こうか……残るのか？それとも私たちと一緒に来るのか
？」

「……残るよ。やってみたいことがあるんだ」

この機を逃したら介入できなくなるかもしれないしな。せっかく転
生したんだし……

「そうか……頑張るんだな。だが忘れるなよ？ 側に居なくても転
生者だとしても……お前は私たちの大切な息子だからな」

「っ……はい」

目から鼻水が出るなんて……今日はどうかしていると思っ……

母さんが海外の病院に移り、父さんが飛行機で行ってから数週間たつた・・・

既に年度も明け、4年生として学校生活を送っている。
まだなのは達には引越しのことは話していない。
自分から話すつもりにはなれないし。

父さんを見送りに飛行場へ行ったとき、気になることを言われた。
「覚悟は早めに決めておけよ」だそうだ。
よく分かんが… 修行をさぼるなっということか…？

そして今日…

小さい頃から聞き慣れているレイジスの中でも、ようやく慣れたライブラリでもない声が聞こえてきた。

魔法少女達と転生者イレギュラーの物語が幕を上げる・・・

第七話：物語の始まり（後書き）

誠「物語に入る前にやらなきゃいけないことがあるな…」
なのは「私も」オハナシ「しなきゃなんないことがあるの…」
作者「…ナンデセウカ？」

誠「更新遅いんだよ！！」（フリージングドライブ）
な「なんで私主人公なのに出版少ないの！？」（全・力・全・開
スターライトブレイカー！！）」
作「あなたまだデバイス持っていないでしょてか二人とも落ちつつ…ギ
ヤアアアア…」

…本日夕方、謎のクレーターと氷塊が発見されたそうです。警察で
は原因を調べるとともに…

第八話：イレギュラーと転機

～Side なのは～

私は高町なのは。文系と体育が苦手なごくごく普通の小学三年生です。

でもこの前、ユーノくんという魔法使いのフェレットを見つけてから、魔法少女なるものをやっています。

ジュエルシードという願いを叶える宝石を集めるために、今日も頑張ります！…と言いたいのですが、今日はお休みしてサッカーの応援に行くことになっています。

あれ…？ 私一体誰に話しているんだろう…？

～Side 誠～

今日はサッカーの試合があるらしい。

原作知識が正しければ、今日はなのはがジュエルシード集めを決意する日だったと思う。

…これは関わらない方がいいだろうな。今後の為に必要だし。適当に町をぶらつくことでもしましょうか。

結局午前中は寝ることにして、今は町を歩いている。

念のためにデバイスは持っているし…何かあっても大丈夫だろう。
…ん？ この感じは…

(マスター。膨大な魔力反応を感知。どうしますか？)

(放っておいていい。まだ関わるつもりはないからな)

(…分かった。だが反応がこっちに接近中なのだが…)

あ… そういやなのはが決意するのって、ジュエルシードのせいで
町中が滅茶苦茶になったからだっけ…？
忘れてたし…

(とりあえず人がいない所へ行こう。いざという時に魔法を見られ
ないように)

(了解)

とりあえず移動するか…

適当なビルの上まで来た。

町の様子を見渡してみたが… 結構ひどいな。

結果もないみたいだし… 重傷者がでもおかしくないと思う。

なぜか居ないのはやっぱり物語だからってことだろうか…

そんなことを考えながらふと目をそらすと…

木の枝によって倒れかかった電柱と、その下で怪我をしたのか動
けないでいる少女がいた。

「っ、レイジス！」
「了解」

普通の魔導士なら高速移動してプロテクションで受け止めるのが普通だろう。

だが俺はプロテクションが使えない。

防御系能力である白炎もその”柔らかさ”ゆえに物理的なものを受け止めるのには適していない。

ならどうするか… 魔力弾で撃ち抜くしかない。

破片で怪我をするかもしれないが…直撃するよりはマシなはずだ。

バリアジャケット諸々を展開している余裕はないので、レイジスには制御だけを任せ、素早く魔力弾を生成・射出する。

電柱程度なら簡単に打ち砕く威力でだされたそれは…

電柱を壊すことなく少しだけ弾いて落とした。

少し疑問をもったが、そんなことより今自分を捜している視線から逃れないと死ぬ（社会的に）

そんな現状においては、遠くで桜色の光が炸裂しているのも些細なことだ。

足早に立ち去ろうとして…

電柱の下敷きになりかけてた少女と目があつた

とあるビルの中

「いや、イレギュラーってのは怖いねえ」

「彼が居たせいでするか嬢の行動が多少変わり、死にかけることになつたか」

「ここで彼女が死んだり大けがしたら、かなり世界の軌道が変わるからな」

「下手に世界の修正力を発動させるわけにはいかないからね。それにしても、あいつには少し考え方を改めてもらった方がいいな」

「（怒ってるのか？）いつ頃から干渉するつもり？」

「しばらくは様子を見るよ。思わぬところで”青”も見つけたしね」

少年の視線の先には、紫色の髪をもつ少女がいた。

Side 誠

や、やばすぎる…

あれってすずかだよ… 制服も着てたし間違いないだろう。

こっちの正体はばれてない…と思いたい…

アニメにはあんなシーン無かったはずなのに… てか怪我したらなのはが責任感じて…といったことになりかねない。

警戒しといて良かったのか？

とりあえず明日なのは達にあつて…それからだ。

Side なのは

(私のせいだ…)

あの時、ジュエルシードの気配がしたのに… 私が放っておいたから…

町がこんな滅茶苦茶に…

「いろんな人に…迷惑かけちゃったね…」

「え？」

側にいるフェレット…ユーノが戸惑った声をあげる。

「な、何言っているんだ。なのはは、ちゃんとやってくれてるよ！」

「……私、気づいてたんだ。あの子が持っているのを… でも、気のせいだって思っちゃった…」

ユーノくんが色々言っただけで励ましてくれているけど…自分のせいで、たくさんの人に迷惑をかけたことには変わらない…

だから…

”自分なりの精一杯”じゃなくて”本当の全力”で…

”ユーノくんのお手伝い”じゃなくて”自分の意志”で…

もう絶対、こんなことにならないように・・・

第八話：イレギュラーと転機（後書き）

こんかいはSideをに入れてみました。
どう書いていくのがいいだろうか…

感想やアドバイス貰えると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5836m/>

氷結と白炎の転生者

2011年10月7日15時26分発行